

「まだまだ早い。」の返事。毎日「今日もだめなの。」と庭を眺めて居りました。埼玉に戻る前日、いよいよ芋掘り決行。汗と土で顔にひげを作り「ワー大きいお芋。」と言っては歓声、小さいのを見つけては「可愛い。」と大さわぎ。バケツ一杯の収穫に満足、普段お店で売っていない様な小さいおいも程人気があって、粉ふきいもにして大満足の顔で食べました。小さな子供にとって、おいもが土の中からコロコロ出て来る事は、おどろきと喜びであった様子で、毎年「今年もいも掘り出来る?」「塩煮パーティーやろうね。」と電話がかかって来ました。孫の人数も増え我家の一大イベントになりました。数年続いたいも掘り行事

でしたが、その後主人が体調を崩し、私も多忙ゆえ、畑をすることが出来なくなりました。しかしいも煮パーティーの方は年々盛大になりました。パーティーは昼食を兼ねているので、テーブルに粉ふき芋を二皿ゆであげ、おむすびと焼豚、野菜サラダとフルーツ、バターといかの塩から、食事の最後は野菜たっぷりのおいもの団子汁が並びます。親も含めて三家族のおしゃべり、孫達は四人おいもを囲んで、テレビゲームその他数々の話が弾みます。個食が多いと云われる最近の子供達。みんな集まって、和気あいあいの場をジャガイモが提供してくれた様です。

「ジャガイモだけ、シェルパの村」

「村にあるのはジャガイモだけ。もうしばらく頑張らなくちゃ」。各国の登山隊がヒマラヤを目指す基地の村で、一人のシェルパがつぶやきました。重い荷物を担って彼等を支えるシェルパには多額の報酬が与えられ、その収入で豊かになった人もいますが、きびしい寒さ、落石、雪崩など、登山は常に死と隣り合わせで、登るときは誰もが必らずお経を唱えるといわれます。

ヒマラヤを訪れる登山者が増え、この関連の仕事、観光業なども年々繁昌していますが、現在ではやはり第一次産業がこの国を支えているのが実状です。ネパールは、インドに接する温暖な平地から寒冷なヒマラヤまで、地勢と気候の変化に富んでいます。山岳地帯が多く、農耕地は少なく、それでいて国民の半数近くが農業に従事しているため、農業従

事者1人あたりの面積は僅か0.3ヘクタールです。低地では、コメ、サトウキビ、茶、ジュート麻など、温帯、亜熱帯性の作物がつくられ、やや高い地帯ではコムギ、トウモロコシ、ジャガイモが生産されます。

ジャガイモの生産量はコメ(年生産量370万トン、以下同)、トウモロコシ(135)、コムギ(110)に次いでいて、作付面積は5万ヘクタール余、年間100~110万トン程度の生産量があり、他の作物のできない、前述の登山の基地のような高地にもつくられていて、これらの地方では主食とされており、他の地方でもたいへん重要な野菜となっています。

高い地域では、春から秋にかけて、平原地帯では春秋両季に栽培されますが、土地条件が決してよくないため、単位面積あたり収量は低く、ヘクタールあたり平均6万トンで、条件のよいところで9トンといわれます。

(編集部)